

【結論】 顕性腎機能障害を呈していない患者において、重症 OSA はシスタチン C を上昇させる独立因子であり、重症 OSA は、eGFR が低下していない前臨床段階のわずかな腎機能低下へも影響していることが示された。

P3-59.

非静脈瘤性上部消化管出血の現状と低侵襲で簡便なバイポーラ止血鉗子による内視鏡的止血法

(内科学第四)

○片岡 幹統、原田明日香、塚本咲貴子
杉本 弥子、立花智津子、立花 浩幸
羽山 弥毅、野中 雅也、八木 健二
藤原 麻里、福澤 誠克、川上 浩平
酒井 義浩、森安 史典

(内視鏡センター)

山本 圭、福澤 麻理、山岸 哲也
河合 隆

【目的】 上部消化管出血では確実な止血効果に加え安全で簡便な内視鏡止血手技が求められる。我々は内視鏡的粘膜下層剥離術 (ESD) の止血デバイスである鉗子型のバイポーラ止血鉗子 (HemoStat-Y: PENTAX) を上部消化管出血に用いている。今回、当院の非静脈瘤性上部消化管出血の現状と低侵襲で簡便なバイポーラ止血鉗子の有用性を検討したので報告する。【方法】 上部消化管出血にて緊急内視鏡検査を施行した 192 例のうち以下の項目を検討した。1. 疾患の内訳 2. 抗凝固、抗血小板薬内服歴 3. 止血法と止血成績。バイポーラ止血鉗子は出血点を正確に把持しなくてはならないとされていたが、我々は出血部の把持が困難な場合、鉗子を開いたまま押し当てることで簡便に凝固止血可能であった。また豚の胃を用いバイポーラの安全性を検討した。【成績】 平均年齢 64.70 ± 14.04 歳。性比 147: 45。疾患の内訳は胃潰瘍 96 例、十二指腸潰 38 例、マロリーワイス症候群 12 例、胃びらん 9 例、胃癌 6 例、食道潰瘍 6 例、ESD 後出血 5 例、その他 20 例。抗凝固、抗血小板薬内服歴は 54 例。止血症例は 104 例あり止血法はバイポーラ単独 61 例、クリップ単独 25 例、クリップ+バイポーラ 9 例、局注法 8 例、APC 1 例。再出血症例は 3 例 (クリッ

プ 2 例、バイポーラ 1 例)。止血不可能症例は 2 例認め、いずれも十二指腸潰瘍出血で視野不良であった。豚の胃の検討ではバイポーラ鉗子は、3 秒の熱変性は粘膜内に留まり、15 秒以上通電を継続しても深部や周囲への組織障害はなかった。【結論】 上部消化管出血の半数以上が内視鏡止血を要し、約 28.2% が抗凝固、抗血小板薬を服用していた。低侵襲、安全かつ簡単なバイポーラ鉗子による止血法は新しい内視鏡止血手技であると考えられた。

P3-60.

Endoscopic removal and trimming of the distal self-expandable metallic biliary stents

(内科学第四)

○石井健太郎、糸井 隆夫、祖父尼 淳
糸川 文英、栗原 俊夫、土屋 貴愛
辻 修二郎、池内 信人、梅田 純子
森安 史典

(外科学第三)

土田 明彦、青木 達哉

Background: Self-expandable metallic stent (SEMS) placement in the palliation of malignant and benign biliary stricture has been increasingly employed in an attempt to prolong patency period. Recently, some endoscopists reported the feasibility of SEMS removal and SEMS trimming when stent occlusion occurs. The aim of this study is to evaluate the efficacy and safety of endoscopic removal and trimming of SEMS.

Patients and Methods: twenty-seven endoscopic procedures were performed in 19 patients in whom SEMS removal had been attempted, and 8 patients in whom stent trimming using argon plasma coagulation (APC) had been attempted at Tokyo Medical University Hospital. The APC settings were: voltage 60-80 W and gas flow at 1.5 L/min.

Results: The mean stent indwelling period of all SEMS was 113.7 ± 77.6 days (range, 8-280 days). There was no statistical difference between malignant and benign diseases (126.1 ± 80.0 and 78.8 ± 65.2 , respectively, $P=0.22$). Of the 19 patients in whom removal of the SEMS had been attempted, the procedure was successful in 14 (73.7%) without procedure-relat-